キャリアヒストリー：わたしの場合 No. 6〈卓球三昧から女性教授へ。世界に通じる医学教育と生涯働く女性医師のロールモデルを目指す。〉

Ⅰ　わたしの医学教育者としての特徴を、端的に表現すると？

＊医学教育者として日本の医学教育を世界に通用すべく変えたいと本気で誓い、行動している。
＊医学部医学科で教授職として，生涯働く女性医師のロールモデルでありたい、と願っている。

Ⅱ　わたしが、医学教育者として（／になるために）歩んできたキャリアとライフ　－時期区分－

①（大学入学前）期　…実家は「モータース」で親戚に医師がおらず、田舎の公立中学・高校で卓球にのめり込む。中学校の国語の教師を目指していた高 3 春に、「医師になれば（医学生の）教師になれる」との父の一言で医学部受験を決める。独学で化学と数Ⅱ（数Ⅲは捨て）を猛勉強し、奇蹟的に合格する。

②（医学部学生）期　…再び卓球三昧で過ごす。6 年生夏、米国 H 大学での臨床実習で、同大 4 年生との実力差に度肝を抜かれる。病理学を専攻したのは、一流指導医への私淑、心の奥底の「学問をしてみたい」気持ち、女性としてのハンディの少なさ（結婚・子育後も生涯継続可），自らの性格などを考慮した。

③（病理学の研修医）期　…母校の病理学講座は米国式の研修体制で、厳しい師匠の下で数年は猛烈に働いた。医師の初期に基礎を叩き込まれたことが生涯の基盤となった（「あとから伸びるヒトは極めて少ない」）。卒後 4 年目に、足を引っ張られて母校を去る。

④（国内の米海軍病院でのインターン）期　…一年間臨床を修練。米国流の卒後教育は楽しく自信がついた。だが、救急外来において診療が未熟な同期インターンへの米国指導医の侮蔑的な言葉に触れ、臨床経験が乏しい日本の医学教育を変革したいという強い動機が芽生えた。

⑤（郷里の病院での病理医）期　…郷里の公立病院で再出発した。上司から「どうして君は私にお茶を汲まないんだ！」と言われ、上京を決意する。
⑥（東京での病理医）期　…関東の病理学界で引き立てられた。研究して X 大学から博士（乙）を授与される。上司の言葉で大学での奉職を目指す。
⑦（大学での病理医）期　…A 大学の病理学講座で講師として診療・教育・研究に従事し、教育のエフォートと熱量が増大。「教える」ことへの興味が深まる。

⑧（結婚・子育て）期　…36 歳でお見合いで国家公務員と結婚、一女を授かる。8 か月の育休（A 大学取得第一号）で、気力・体力・診断の勘が低下した。

⑨（医学教育者への転身）期　…病理学の教授選考に僅差で敗れるが、医学教育学講座教授のポストを打診され、初心に帰り転身を決める.

⑩（別の大学に異動）期　…B 大学医学教育部門に異動し、カリキュラム改編などに奮闘している。

Ⅲ　医学教育者としての、これまでのキャリアとライフの歩み

時期区分	ライフイベント等	特に取り組んだこと（課題・重点等）	達成・実現できたこと（業績・効果等）	困難さや苦労したこと（問題・悩み等）	原動力や助けられたこと（動機・契機・環境等）
①大学入学前　期	・実家は「モータース」で，5人姉弟の次女、中高時代は卓球三昧。	・文系・独学で医学部受験。	・現役合格でき、周囲から奇跡と言われ舞い上がる。	・塾も情報もない田舎で非医師家庭からの医学部受験。	・父の言葉で医学部受験を決意。 ・私立医大進学を親に感謝。
②医学部学生　期	・私立大学医学部に入学する。 ・卓球三昧の日々を過ごす。 ・6年時にH大学に短期留学。	・母校で最も教育的な病理学の指導医に憧れ，「外科病理学（病理診断学）」を専攻。	・卓球で、西医体は1年から卒業まで女子シングルス優勝、全医体も2度出場しともに優勝。	・女性で結婚して子供のいる医師がいない。 ・女性教授もいない。	・短期留学時に、米国医学生の臨床能力に驚愕する。
③病理学の研修医期	・母校の病院で研修医となる。	・毎日必死で，週に100時間くらい働いた。	・医師になった喜び。病理診断の基礎が医師の生涯の基盤に。	・夢中で頑張る姿に対し、男性が妬みを示す。	・病理学の指導医と若い先生方との学問を楽しむ輪に入りたい。
④国内の米海軍病院でのインターン期	・インターンとして臨床に従事。	・海外留学を希望する。	・「出る杭は抜かれる」世界の楽しさを実感。	・医師としての能力が、個人でなく教育の違いで生じること。	・整った研修制度、意見を尊重する環境、性別等によらない評価により、自信が増した。
⑤郷里の病院での病理医　期	・常勤の病理医として勤務。	（・のどかな時代。）	・病理専門医資格を取得。	・地方での大学の権威，年功序列，男尊女卑などの現実。	・地方では女性は力が生かされないと悟り，上京を決意する。
⑥東京での病理医期	・病理医として勤務。 ・関東の病理学の世界でフォロアーシップを受ける。	・上司が厳しく，ひとときも休むことは許されず診断や研究に従事する。	・X大学で論文博士（乙）を取得。病理の世界で広く活躍。全国・世界に視野が拡大。	・評価してくれた上司が去り、後任により苛められる.	・上司の「お前は則天武后になれ」の言葉が契機となり、大学で教職を目指す。
⑦A大学の病理医期	・A大学病院で医局長を務める。	・講師として診療、教育、研究に従事する。	・大学における教育（授業や実習）の企画・運営。	・診断・教育より論文数を評価する体制。昇進の性差別。	・学生に教える事が得意との自信 ・「女性教授第一号」を目指す。
⑧結婚・子育て期	・36歳で国家公務員と見合い結婚 ・出産（一女を授かる）。	・育児休暇8か月を取得（A大学「育休取得第一号」）	・伴侶や子供のいる幸福。	・育休で気力、体力、診断の勘の衰え。回復に5年必要。	・結婚・子供を理由に医師の活動を抑制する選択肢はない。
⑨医学教育者への転身　期	・病理学教授の選考に敗退。 ・医学教育学講座教授に就任。	・カリキュラムの改編。	・ベスト・ティーチャー賞を3年連続で受賞	・教育の業績が論文数より評価が低いという大学の体制。	・教授選敗退が「不幸中の幸い」で、憧れの教育活動に専従する。
⑩別の大学への異動　期	・B大学で医学教育責任者に就任。 ・娘が医学部に入学。	・カリキュラムの改編。	・欧米に近い画期的なカリキュラムの導入	・教員の教育への多様な想いや熱量の差。	・研修医と同等以上の学生の成長 ・大学執行部による理解

Ⅳ．　抱負

・卒業時には医師としてプロフェッショナルな働きができる学生を涵養することを目指して、新カリキュラムを導入した。新カリキュラムで初年次から臨床実習を経験し、オンデマンド講義を自主自学し、アクティブ・ラーニングで学んできた教え子達が医学界で活躍することを楽しみにしている．
・現在は「新新カリキュラム」を構築中である．初年次に基礎医学を修了し、修学年数の半分（日本では 3 年間）を、診療参加型臨床実習に充てる。
・将来、さらに次のカリキュラム（新新新カリキュラム？！）では、基礎・臨床統合教育や診療参加型臨床実習を徹底させた欧米を上回るカリキュラムにより、世界一の医師が涵養されることを「ご隠居」として眺めたい．
・現行の卒後臨床研修制度は、特に大学病院では付与される責任と権限が不十分だと憂えている。働き方改革も加わり、卒後の最も大切な時期に若い医師達は鍛えられず、コスパ重視で拝金主義の風潮がまかり通るようになると危惧される。日本の理系のトップである人材の能力を生かす制度に変えていきたい。

Ⅴ．　次世代や悩めるあなたへのメッセージ

私は女性として、結婚願望や子供を持ちたいという願望が人一倍強かった。しかし、医師として生涯働くこともまた当たり前だと考えている。それが理解できる伴侶を得て、あらゆる助力を得ることさえ惜しまなければ、子供は勝手にちゃんと育つ。

女性医師は忙しいので、「医師免許が必要ない事はしない」と割り切り、時間を（家事や過剰な子育てのためではなく）家族と医師としての能力向上のために使うことが大切である。また、「子供は 3 歳まで母親が育てるべきだ」とか、「幼児教育を授けないと偏差値の高い大学に入れない」などの「神話」（ウソ）に心を乱されないでほしい。

私の場合、子育てというより「子供がいる生活を楽しむ」という感覚であった。職住接近し、子供は近所の保育園に 0 歳から元気に通った。親・姑、親戚、ご近所さん、学生シッターなど、あらゆる助力を総動員した。家事のための機械（全自動洗濯・乾燥機、食器洗浄器、生ゴミ・ディスポーザー、自動掃除機など）は完備した。子供は、今日のように、便利で恵まれた時代にあれば，世話を焼かない（焼けないのだが）くらいが自立して成長するので丁度良いと考えている。今は娘が医学生となり、母として娘の成長を楽しみにしつつ、医学教育のプロとして少しでも良い教育を後世に遺したいと思っている。

職位を上げるということは、仕事をヒトに振ったり、時間を自分でコントロールできるなど、自由度が高くなることである。結婚や子育てを希望する女性医師は、むしろ昇進に対してもっと貪欲になるべきである。